

10月号

町史のひとこま

(第十五回)

豊前覚書 — 高鳥居城攻撃に

加わった異の物語

豊前覚書は、昨年『博多筑前

史料豊前覚書」と題して出版されましたが、江戸時代初期の元和元年（一六一五）に記されたものです。福岡古文書を読む会が解説し、九大教授川添昭二氏が校訂にあたっています。

これを書いた城戸清種は管崎宮主家の家臣で、父城戸豊前守の語つことと、清種自身の目撃した事実を書き記しているのです。このため、記述は具体的で、戦国時代末期の事件が、まがあたりに見るよう生き生きとえがかれています。

城戸豊前守は耳聞として、筑後・肥前の情報収集に従つたことがあり、これは一種のスペイ任務でした。天正十四年八月の立花城主立花統虎による高島居城攻撃に加わっていて、立花

宝滿の上の雲

命令なく攻撃開始

た。すると京林は「ですから、今日宝満を攻めればいいのですよ。勝利の雲立ちですぞ」と言つた。

燃えあがる城

ら、まっさきに城に攻め登つたのでした。

「今日は打回りをおおせつけられたのである。下知（命令）されたのである。」

高鳥居城に攻撃をしかなければならないのに、腹するのなら、鉄砲を背負つて切腹のものでござ。やめられれば切腹のものでござ。やめられされ」と声をかけて立ち去つて、いきました。一同は「どうせ切腹するのなら、鉄砲を背負つて討ち死にしようぞ」と言いながま

に攻めかかり、大手から城に入りました。さらに「大高鳥」と書かれた額を奪つてゐる者があるのでした。

高鳥居城を攻めぐずし、田中
村に頸を集め実見しました。そ

高鳥居城についての記述は以上ですが、戦国のならいとは言え、せいきん、せいかく、のようすが、炎

（町誌編集委員会事務局、石瀧）

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

110

卷之三

高鳥居城跡から出た 土器類（資料館）

